

小学生の高齢者理解

— 祖父母へのプレゼント作りを通して —

Understanding of School Children Hold of the Aged
— Making of the Present for Grandparents —

多々納 道子・毛利 秀子*・平井 早苗**
Michiko TATANO, Shyuko MOORI and Sanae HIRAI

要 旨

本研究は、小学校家庭科の高齢者に関する生活福祉教育の教材開発を目的とした。祖父母参観日に交流したり、プレゼントを作ったりすることによって、祖父母を通しての高齢者理解を深めることが、可能であった。

児童は、今回の授業に意欲的に取り組み、今後もさらに学習したいとしていた。今後の課題として、高齢者理解をさらに深めるには、祖父母以外の高齢者との交流を考えた教材開発が必要であると考えられる。

キーワード

生活福祉教育、高齢者理解、高齢者のイメージ、共生

I 目 的

我が国の急速かつ複雑な高齢者問題は、個人や家族にとって、またそれらを支える社会の側からみても現代の最も大きな課題の一つとなっている^{1) 2)}。特に高齢者の生活面での課題解決には福祉教育の力、中でも家庭科での生活福祉教育に負うところが大きく、生涯学習の一端として捉え、積極的に推進していく必要がある。

福祉に関わる教育の理念についての共通理解は、現在まだ十分に確立されているとはいえない。東京都社会福祉協議会福祉教育研究委員会、全国社会福祉協議会福祉教育研究委員会におけるとらえ方や栃木県教育委員会による福祉に関する教育の指導書³⁾などを考え合わせると、人間尊重と社会連帯の精神を基盤として、民主的な市民を育成することにあるといえる。具体的には、福祉についての理解を深め、福祉を実践する能力や態度を身につけさせることであり、様々な人々と真の意味での共生できる能力を育成することにある。これらのことからみると、福祉教育のねらいは、「家庭生活を中心とする人間の生活の充実向上とその福祉を図る実践的能力を養うこと」⁴⁾、「個人及び家族の発達と福祉」⁵⁾に関わる内容が重視される家庭科とかなりの部分が重なりあっていることが理解できる。したがって、家庭科と福祉教育のねらいを一体的に捉え、家庭科の中で基本的人権の尊重を基盤に、高齢者や障害者等の問題をはじめとする諸問題を意図的、計画的に取り上げていくことは、課題解決に非常に有効であると考えられ

る。

新潟県における福祉教育の現状調査結果⁶⁾によると、福祉教育は特別活動や道徳で行われることが多く、家庭科において必要と認めていても、実施しているのは3割に満たないこと、小学校段階では地域の高齢者との交流活動に偏っていることなどが明らかにされている。したがって、家庭科において高齢者に関する生活福祉教育の教材開発を行う必要がある。そのためには、子ども達が高齢者や高齢者問題をどのように捉えているかの高齢者観や高齢者問題に関する学習意欲等について把握する必要があるが、現在十分に明らかにされていない。

そこで本研究では、まず、小学校家庭科の授業の中で高齢者に関する生活福祉教育をどのように展開したらよいかの基礎資料を得ることを目的として、小学生の高齢者観を調査し、検討した。次に、祖父母へのプレゼントを通して高齢者理解を深めることを目的とした授業研究を行ったので、結果を報告する。

II 方 法

1 小学生の高齢者の意識と実態に関する調査

調査対象は島根県内の小学校6校の第5学年の男女児童466人とした。有効回収数は、男子236人、女子228人の合計464人で、有効回収率は、99.6%であった。調査は家庭科の時間に家庭科担当教員の下で、質問紙法により行った。

調査時期は、1996年9月下旬～10月下旬にかけてであった。

調査内容の項目は、家族構成、祖父母との同居経験・交流経験、高齢者のイメージ、高齢者問題に関する学習意欲などであった。

2 授業研究

(1) 授業担当者は、平井早苗である。

(2) 授業は、1996年9月10日～10月1日に実施した。

(3) 授業の設計

事前調査による子ども達の意識や実態をふまえて、高齢者の特徴を知ること、身近な存在である祖父母との心のふれ合いを通して、さらに高齢者の理解を深めることを主な目的として、題材を構成することにした。

1) 祖父母へのプレゼントを通して高齢者を理解しようの指導計画

第1次：おじいちゃん、おばあちゃんを知ろう…1時間

第2次：プレゼントは何にしようかな…1時間（祖父母参観日）

第3次：プレゼントを作ろう…4時間

課外：半返し縫い等の基礎技術の練習

作品の展示会（廊下へ展示することによって、多くの人達にみてもらう）

祖父母へのプレゼント

2) 資料

高齢者の考えや実態を知り、高齢者を理解すること、そして子どもも高齢者もともに豊かに幸せにくらすにはどうしたらよいかについて考えるための資料として、アニメ「ぼくがおじいちゃん、おじいちゃんがぼく」（貯蓄広報中央委員会製作）を使用した。

Ⅲ 結果および考察

1 小学生の高齢者の意識と実態に関する調査

(1) 家族構成

調査対象者の家族構成を全体的にみると、核家族が54.3%、拡大家族が48.7%とほぼ半々であり、男女児童間にほとんど差異はなかった。1993年の厚生省「国民生活基本調査」⁷⁾によると、核家族世帯が59.4%、三世帯世帯が12.8%になっており、本調査対象者は全国的な傾向に比べて、拡大家族が著しく多いという実態を示した。

(2) 祖父母との同居経験

祖父母との同居経験には男女児の差がほとんどなく、全体的にみると「今、一緒に住んでいる」ものの割合が46.7%と最も多かった。「一緒に住んだことがない」は42.5%で、両者の違いは僅少であった。また、「前に一緒に住んでいた」は10.8%で、「今、一緒に住んでいる」ものを合わせると、57.5%になった。したがって、祖父母を通して高齢者を理解する機会を持つものの方が若干多いといえることができる。

(3) 祖父母との交流状況

祖父母との交流状況として、祖父母の思い出と会話および祖父母以外の高齢者との活動経験について明らかにした。

まず、日常生活における祖父母との思い出が「たくさんある」と答えたものは男児が47.5%、女児が59.2%であった。これに「少しある」というものを加えると男児が85.2%、女児が88.6%になり、ほとんどの児童には祖父母との間に記憶に残るような思い出があるといえる。

次に、日常的に祖父母と話をしたり電話をかけたりするかの会話についてみると、表1に示すように、「よく話す」は、男児46.4%、女児62.3%、「少し話す」女児31.8%、男児25.4%であった。両者を合わせると、祖父母と話す者は男児78.4%、女児87.7%となった。 χ^2 検定により、男女児間に5%水準で有意差が認められた。会話を媒介とした祖父母との交流は、女児のほうが積極的な傾向にあることが理解できた。祖父母と小・中学生の孫との交流状況を調査した結果⁸⁾によると、会話や贈り物などによる交流はよく行われて、女児の方が交流頻度の高いことが明らかにされており、本調査結果と同様であった。

このように、小学生の段階では、会話を通しての祖父母との交流は、総じてよくなされているといえる。

	人 (%)			χ^2 値
	男 児	女 児	全 体	
よ く 話 す	110 (46.6)	142 (62.3)	252 (54.3)	14.5**
少 し 話 す	75 (31.8)	58 (25.4)	133 (28.7)	
あ ま り 話 さ ない	38 (16.1)	23 (10.1)	61 (13.1)	
ぜ ん ぜ ん 話 さ ない	13 (5.5)	4 (1.8)	17 (3.7)	
無 答	0 (0.00)	1 (0.4)	1 (0.2)	
計	236 (100.0)	228 (100.0)	464 (100.0)	

p<0.01***

(4) 祖父母以外の高齢者との活動経験

祖父母以外の高齢者との活動経験の有無について尋ねたところ、表2のように「たくさんあ

る」と答えたのは、男児14.8%、女児17.1%に過ぎなかった。「少しある」というのは、男児37.3%、女児50.4%であり、全体的に見ると、「少しある」というものが多いといえる。しかも、その割合は女児の方が多く、 χ^2 検定によって、1%水準で両者の間に有意差が認められた。祖父母との日常的な会話を含めて、高齢者との交流は、女児の方に積極的な取り組みがみられた。

表2 祖父母以外の高齢者との活動経験 人(%)

	男 児	女 児	全 体	χ^2 値
たくさんある	35 (14.8)	39 (17.1)	74 (16.0)	16.5**
少しある	88 (37.3)	115 (50.4)	203 (43.7)	
あまりない	70 (29.7)	56 (24.6)	126 (27.2)	
ぜんぜんない	43 (18.2)	17 (7.5)	60 (12.9)	
無 答	0 (0.00)	1 (0.4)	1 (0.2)	
計	236 (100.0)	228 (100.0)	464 (100.0)	

p<0.01***

(5) 高齢者に関するイメージ

小学5年生が高齢者に関してどのようなイメージを持っているのかを明らかにするため、これまで高齢者のイメージ調査^{9) 10)}に使用された用語を参考にして、15のイメージ用語を選び調査に使用した。そして、各イメージ用語を5段階評定尺度によって得点化した。児童からみた高齢者のイメージを表す用語の得点は、表3に示される通りである。

表3 高齢者のイメージ (点)

	男	女	t 値		男	女	t 値
明るい—暗い	4.16	4.24	1.06	あたたかい—つめたい	4.17	4.45	3.42**
うれしい—悲しい	3.83	4.00	2.10*	積極的—消極的	3.67	3.79	1.23
強い—弱い	3.38	3.39	0.15	すぐれた—おとった	3.79	3.94	1.60
きちんとした—だらしない	4.22	4.31	1.10	素直な—強情な	3.66	3.94	3.00**
やさしい—きびしい	4.26	4.50	2.76**	すきな—きらいな	3.84	4.22	4.40**
大きい—ちいさい	3.23	3.27	0.38	速い—おそい	3.00	3.03	0.31
バラ色—はい色	3.48	3.53	0.59	幸福な—不幸な	3.91	4.20	3.27**
いそがしそう—ひまそう	3.76	3.76	0.05				

p<0.05*** p<0.01***

これらイメージ用語の得点から判断して、男女児とも高齢者に関しては、肯定的なイメージとして「やさしい」、「あたたかい」、「きちんとした」、「明るい」という感じを強く抱いていた。次いで、男女差がみられ、女児の方に強く捉えられているのは、「うれしい」、「すきな」、「幸福な」であった。否定的な傾向にあるが、それ程強くないものとしては、「弱い」、「小さい」および「おそい」であった。

このように、児童の高齢者に関するイメージ用語の得点は、男女児間で若干の差違はあるものの、概ね類似した傾向にあるといえる。また、「やさしい」、「あたたかい」、「きちんとした」、「明るい」に代表されるように、全体的に高齢者を肯定的および好意的にとらえているという特徴がみられた。大学生を対象にした調査^{11) 12)}の場合、「弱い」や「頑固」などの高齢者の否定的な面を厳しく捉えて、否定的な傾向にあることと対照的であった。また、これらのイメー

ジを規定する要因として最も効果の大きいのは、高齢者と話す機会であることが明らかにされていた。これらのことから、本調査における児童の高齢者に関するイメージが、非常にあたかいかいものになったのは、自分の祖父母と直接的にも間接的にも日常的に交流する頻度が高いものが多く、これらの交流によってイメージが形成されたことによるものと考えられる。

(6) 高齢者問題に関する学習意欲

児童に高齢者問題についての学習意欲があるか否かについてみると、高齢者について学習したいというのは、男児が51.7%、女児では68.5%であった。現在小学校では、学習指導要領において直接的に高齢者問題についてはほとんど取り上げていないにも関わらず、男女児とも半数以上のものが学習したいという意欲を示したのは、社会全体での関心の高さを反映したものとみなせるであろう。

以上の結果をまとめると、次のようである。

以前に一緒に住んでいたものを含めて祖父母との同居経験のあるものは、約60%であり、全国平均と比べて、祖父母を通して高齢者を理解する機会を持つものの方が多かった。約80%の児童に記憶に残るような祖父母との思い出があり、また会話の頻度が高く、交流状況はよいといえる。しかし、祖父母以外の高齢者との交流は少なかった。高齢者に関するイメージは肯定的で、好意的であり、高齢者問題に関する学習意欲を持つものは、過半数を越えていた。したがって、この段階は高齢者に関わる問題を学習題材に取り上げるよい時期ではないかと考えられる。

2 被服領域における祖父母との交流を深め、高齢者の理解を図るための授業実践

授業実践の内容と指導法の検討

(1) 目的

高齢者の考えや実態を知り、高齢者の特徴をふまえたうえで、祖父母に役立つプレゼントを製作し、積極的に高齢者と交流を深めることが出来ることを目的として授業研究を行う。

(2) 対象および方法

島根大学教育学部附属小学校5年の1クラスを対象として、授業研究を行った。具体的には、高齢者理解を深めるための授業実践として、被服領域において、児童が祖父母のために手作りのプレゼントを作り、実際にプレゼントをするという活動を通して、自分の祖父母や高齢者一般について考えさせたものである。

授業方法として、まず、一般的な高齢者の考え方や実態を知るために「ぼくがおじいちゃん、おじいちゃんがぼく」というビデオを視聴し、自分たち小学生と高齢者との違いを比較・検討することによって、高齢者の生活実態や特徴を理解した。その後、高齢者の特徴をふまえて、祖父母の日常生活に役立つ物を考え、製作した。製作には、すでに小物の製作において使用したことがある布やフェルトなどの被服材料を用いた。製作品にはメッセージを添え、祖父母にプレゼントするという方法をとった。

島根大学教育学部附属小学校では、保護者の参観日と同様に、毎年9月の敬老の日の前に「おじいちゃん、おばあちゃん参観日」を設け、祖父母に児童の学習を参観してもらったり、学習発表会を催し、交流を図っている。そこで、この祖父母参観日に家庭科の授業を設定し、

自分や友達の祖父母との交流を通して直接的に高齢者の特徴を理解したり、祖父母が参観日に出席した児童は、製作品を祖父母と一緒に考えることに当てる授業とした。

(3) 事前調査

小学生の高齢者の意識と実態を明らかにしたのと同じ調査を、授業対象の島根大学教育学部附属小学校の児童に実施したところ、ほぼ類似した結果が得られたので、説明は省略する。

(4) 授業の概要

第1次：「おじいちゃん、おばあちゃんを知ろう」

本単元の導入として、まず祖父母が何人いるかななどの実態と自分にとって祖父母はどのような存在なのかについて明らかにした。祖父母が4人いる児童が半数以上であったが、1人もいないものが1人いた。この児童に対しては、知り合いや近所にいる高齢者を取り上げるよう指導した。

まず、「自分にとっておじいちゃん、おばあちゃんは？」ということについての児童の答えは、「やさしくていろいろな物を買ってくれる」、「とってもやさしい」、「だいたい何でも知っている」というように、親しみが持て、しかも自分達にはない優れた能力を持っている存在として理解していることが明らかになった。

さらに、「自分がおじいちゃん、おばあちゃんのような年になった時のことを考えたことがあるか」と尋ねたところ、ほぼ全員が「考えてみたこともなかった」と答え、「大人になったら考えるかもしれない」というものもいた。このように、おじいちゃん、おばあちゃんのような人は、今の自分とはほど遠い存在として捉えていることが明らかになった。

その後、「ぼくがおじいちゃん、おじいちゃんがぼく」のビデオを視聴した。児童達は大変熱心に視聴した。ビデオの感想例には、

- ・「お年寄りには動きにくいんだな」(男子)
- ・「お年寄りには器用だな」(女子)
- ・「お年寄りにはお年寄りの考えがあるし、若い人には若い人の考えがあると思った」(女子)
- ・「もう少しお年寄りをいたわって大切にしていかなければならない」(男子)
- ・「困っているところを見かけたら、手を貸してあげたい」(男子)

などといったものがあり、自分と同じ年齢の者と比較して、高齢者の特徴を把握しようとしていた。

第2次：「プレゼントは何にしようかな」

あらかじめ作成しておいたぼく・わたしのおじいちゃん、おばあちゃんレポートに基づき、祖父母についての趣味や思い出、敬老の日にしてあげたいこと等について発表しあった。その後、教員の方から、「一学期は自分のために小物を作ったけれど、今度は手作りのものをおじいちゃん、おばあちゃんにプレゼントしよう」と提案したところ、全員が同意した。そして、学校での製作時間は4時間とし、手縫いでできるものとした。特に考慮する点として、おじいちゃん、おばあちゃんについて考え、役に立つ物を作ること、心を込めて作ることとした。

祖父母のために製作する作品の参考例として、手縫いでできるクッション、壁掛けや針山等を提示した。

当日は祖父母参観日であったので、出席した祖父母を持つ児童は、製作物について相談した

り、話を交わすことで交流を深めていった。児童達は、自分で考えたり、祖父母と相談したり、友達と相談しあったりするなかで、製作物を一生懸命考え、決定した。

本時までには製作物を決定した児童には、他の児童に参考になるように何を製作するのか発表させた。製作物は、「めがねケース」、「コースター」、「ポケットティッシュ入れ」、「だきまくら」、「クッション」、「めがねカバー付き壁掛け」等であった。

第3次：「プレゼントを作ろう」

作りたいプレゼントの出来上がり予想図を小物製作カードに記入させた。また製作期間中、祖父母への思いを持続して取り組むことができるように、なぜその作品を作るのか、決めた理由や願いを記入させた。


製作物が児童一人一人によって異なることと小物類の製作は2回目になるので、実物、参考資料などを準備し、児童が主体的に取り組めるように工夫した。その結果、児童達は、大変意欲的に製作に取り組み、わからないところは資料を見たり、友達に聞いたり、教員に相談するなど積極的に進めていった。しかし、祖父母へプレゼントするということから、頭初想定していた小物ではなく大作に取り組んだ児童が多く、製作時間は予定よりも2時間超過し、6時間を要した。完成した作品に祖父母への思いを込めたメッセージを添えて渡した。その後、全員の児童に、祖父母や知り合いの高齢者からプレゼントに対して、感謝の気持ちを示した言葉や手紙が送られ、児童達との心の交流が実現できた。

小物製作カード

おはあちゃんにおはあちゃんへのプレゼント

番号 名前

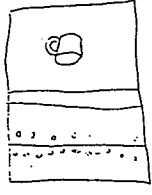

プレゼントは何にしようかな。

<p>プレゼントする物 クッション <small>でかき ぬいぐるみ</small></p> <p>できあがり図</p>  <p>材料・その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・布 ・ワタ ・糸(布の色に合わせて) ・わた <p>から 合して、しゅう とが、バツワークをする</p>	<p>材料・その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・色紙 ・はさみ ・のり ・はさみ
<p>決めたわけ・願いなど</p> <p>おはあちゃんが「クッション」って、言ったので、そうしました。おはあちゃんは、花が好きなので、花が、バツワークをする。このクッションで、くっついて、ほしいな。</p>	

おはあちゃんにおはあちゃんへのプレゼント

番号 名前

プレゼントは何にしようかな。

<p>プレゼントする物 ポケットティッシュ入れ</p> <p>できあがり図</p> 	<p>材料・その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・色紙 ・はさみ ・のり ・はさみ
<p>決めたわけ・願いなど</p> <p>おはあちゃんに、色々な物を持っているから、これにきこったけど、ティッシュ入れなら、いくつあってもいいと思、たから、これに決めた。</p> <p>先生から</p> 	

(5) 授業を通しての学習者の変化

1) 「くらしの詩」にみられるビデオの感想

本単元に入った最初に、「ぼくがおじいちゃん、おじいちゃんがぼく」のビデオ視聴後に、くらしの詩を書かせた。くらしの詩は、生活全般を扱う家庭科の授業と関連させて、授業や生

活の中で感じたことを自由に記述するいわば感想文のようなものである。詩という表現をしているが、形式にはこだわらず、児童の率直な気持が表現できるようにしてある。教員はこのくらしの詩を窓口にして、児童がくらしのなかで目を向けているものや、疑問に思っていること等様々なことを把握できるという利点がある。

このくらしの詩に記述された内容から、児童の高齢者についての思考や態度を3つの観点から分析した。

- ビデオ視聴によって、新たに理解できた事実のみを記述したもの (15.8%)
 - ・ビデオをみて、福祉しせつというところがあるんだとわかった。(女子)
 - ・おとしよりでもふくしせんたーなどにいろいろなべんきょうをしているのだな。(男子)
 - ・お年寄りは動きにくいんだな、とても動くのがおそくなって、体が不自由になって、たいへんだということがよくわかった。(男子)
 - ・老人は茶わんやさらをつくることがうまい。おとしよりになっても手の動きがきょうだ。(男子)

児童がビデオによって新たに理解できた主なことは、小学生や自分の祖父母と比較しての高齢者の行動や考え方の特徴および福祉施設に関することであった。特に福祉施設に関しては、ビデオを見て初めて、福祉施設の存在を知ったという児童がほとんどであった。これらのことから、児童がこれまで高齢者やその生活福祉についての学習機会をほとんど持たなかったことが理解できた。

- 高齢者の生活実態を理解し、それに対してどう感じたかの反応を示したもの (31.6%)
 - ・自分で一生懸命やったつもりでもちゃんと出来ないのがかわいそう。(男子)
 - ・若い人には知らないことをたくさん知っていたり、人にはまねのできないすごいことができたりするから、おとしよりはすごいと思います。(女子)

これらに代表されるように、高齢者の身体的な不自由さを理解し、高齢者のおかれている立場への同情と共感、高齢者の身体的、知的に優れた能力への尊敬という2種類がみられた。その割合は、前者が2、後者が1であった。高齢者に対しては、特に身体的能力の弱い面への同情という感情が強く表現される傾向がある。それだけでは、高齢者をよく知ったことにはならないので、高齢者の能力を客観的に理解できるようになる必要がある。

高齢者の実態から見て、自分に出来ることは何かを考え、助けになるように自分にできることをしてあげたいと記されているもの (52.7%)

- ・おとなとこどもは、体がかかるいしはすることもできるけれど、おじいさんやおばあさんは、こしがいたいし、からだがおもうように動かない。だから、しんごうのとき、ひかれそうになるときはたすけてあげたいです。(男子)
- ・おとしよりは、動きにくくて毎日大変だなと思いました。私たちもこれからいろいろと親切にしていこうと思いました。
- ・おじいさん、(うちの) おばあさんは思えばすごきたいへんなんだなあとビデオを見ながら思いました。でもぼくのおじいさんは元気でピンピンです。ぼくも親切な心は持ち続けたいな。(男子)

- ・私もおじいさん、おばあさんが困っていたら、助けてあげようと思いました。(女子)
- ・これからは、お年寄りを見かけたら、ぼくたちが手をかしてあげたいです。(男子)

今回使用したビデオの内容はその題名からわかるように、おじいちゃんと主人公の小学5年生のぼくが入れ替わり、それぞれの生活を模擬体験し、お互いのことを理解し合うというものである。これらの感想からみると、自分が模擬的におじいちゃんになるということから、おじいちゃん、おばあちゃんの生活の仕方を自分のこととして、真剣に考えることができ、高齢者理解を深めることにつながったものと思われる。したがって、今回のビデオ視聴は、高齢者の考えや生活実態を理解させるのに、非常に有効であったといえる。

2) 高齢者に関するイメージ

今回の授業によって、児童の高齢者に関するイメージがどのように変化したかを求めた。授業前の結果は、2、(5)で述べた今回調査した島根県児童のイメージとはほぼ類似しており、高齢者に対して、肯定的で好意的な傾向にあった。授業後においても、ほぼ同様の結果を示し、授業前と大差ないものであった。

高齢者のイメージは、会話などの交流を通して形成されるものといわれているが、今回の児童の直接的な交流は、自分や友達の祖父母という限定されたものであるため、児童の高齢者のイメージを大きく変化させることは出来なかったものと考えられる。したがって、今後祖父母以外の高齢者と直接的に会話をしたり活動をするなどの交流機会を設けることが、高齢者理解を深めることになると思われる。

3) 学習意欲

これら一連の授業実践の後、本單元についての児童の学習意欲を明らかにした。学習意欲については、学習題材への関心、学習内容の理解、学習仲間への所属性という3つの側面から調査した。

まず、児童が学習に意欲的に取り組んだかどうかを尋ねた。「祖父母へプレゼント・高齢者と家族について学習したことは楽しかったですか」と「学習してよかったですか」については、男女とも全く同じ結果で、全体でみると、「はい」が30.0%に対し、「いいえ」が57.5%であった。95.0%の児童が学習したことは、「楽しかった」、「よかった」と答えた。これに対して、「祖父母へのプレゼント・高齢者と家族のような学習をもっとやりたいですか。」については、75.0%のものが「はい」と答えた。

次に、授業中の学習態度がどうであったかを尋ねた。「授業中のあなたの発表や活動が、クラスの友達役に立つように努力したと思いますか。」においては、今回の設問のなかで、唯一「はい」より「いいえ」と答えたものが男女とも上回る結果で、全体でみると「はい」が30.0%に対し、「いいえ」は57.5%であった。これまでの調査と同様の結果¹³⁾が得られており、自己評価は厳しくなされているといえる。

4) 自分の祖父母以外の高齢者との活動意欲

児童達が、自分の祖父母以外の高齢者と話をしたり、一緒に活動をしてみたいかについて尋ねた結果、男女差はほとんどなく、全体で82.5%のものが、積極的な活動意欲を示した。

高齢者を理解し、交流を図ることを目的とした授業実践の中で、児童達は自分の祖父母はもちろんのこと、祖父母以外の高齢者とも交流を深めたいという積極的な態度が育成されたもの

と思われる。

5) 授業後の感想

本授業実践終了後に、今回の授業を通して祖父母への気持ちがどの様に变化したのかを明らかにする目的で、「わたしのおじいさんやおばあさんは～」という文章を与え、「～」以下の部分を、自分なりにうめていくことをさせた。

その結果、ほとんどの児童が、「とてもやさしくしてくれる」、「おじいさんはきびしい、おばあさんはやさしい」、「たまにおこるけど、やさしい」というように、自分との関わりで祖父母の態度を述べたものが、90.5%であった。中でも「とてもやさしくしてくれる」、「すごくやさしい」というように「やさしい」という語句を述べたものが、75.0%あり、児童にとって祖父母は何よりもまずやさしい存在になっているといえる。次で、「しゅみが多く、いろいろなことをやっています」、「よくはたらいています」、「わたしが行くと、よくそうじをしています」といった生活行動の特徴を示したものが、32.5%であった。さらに、「とてもゆかいです」、「とてもおもしろいです」といった祖父母の性格特性を述べているものが、17.5%、「耳が悪いです」、「健康です」といった身体的な特徴を述べているものが、10.5%あった。

このような授業後の児童一人当たり、祖父母についての記述項目を平均すると、2.3 となった。これに対して、授業前には平均して1.4 項目であり、増加したのは祖父母の自分に対しての態度や身体的な特徴に関するものが主であった。自分との関わりで、祖父母についてよく観察し、理解しようとしていることがわかった。

今回、最も多くみられた「やさしい」というのは、人と人との関係で、相手があって初めて生じる感情である。したがって、児童は祖父母の存在を人と人とのつながりの中でとらえているといえることができる。

6) 祖父母にしてあげたいこと

授業前に、「おじいさんやおばあさんにどんなことをしてあげたいですか」という質問をしたところ、ほとんどの児童は、「手伝い」、「肩たたき」、「話をする」といったように、単純な行動表現をしたに過ぎなかった。それが授業後には、表4に示すように、「自分にできることなら、おじいちゃんたちにしてあげたい」、「かんたんなことでもいいから、役にたきたい」、「手伝いや肩たたき、その他おじいちゃん、おばあさんが楽になること」、「やさしくしたい。困っていたら、手伝いたい」、「プレゼントを作ってあげたり、話をしてあげたい」というように、行動や心情を表現するだけでなく、何故そうするのか、どのようにするのかなどを記述しており、担い手意識が芽生えていることが伺えた。高齢者についての理解をふまえた行動や心情の表現になったものと考えられる。

表4 自由記述にみる「祖父母にしてあげたいこと」に関する意識の変化

	A	B	C	D	E
事前調査	話しかけている。	かたたたきとか。	かたたたき。	手伝い。 話す。	
事後調査	自分にできることなら、おじいちゃんたちにしてあげたい。	かんたんなことでもいいから、役に立ちたい。	手伝いやかたたたき、その他おじいちゃんやおばあちゃんが楽になること。	やさしくしたい。 困っていたら、手伝いたい。	プレゼントを作ってあげたり、話をしてあげたい。

IV まとめ

小学校家庭科において、高齢者に関わる生活福祉教育を実施するための教材開発を行うことを目的として、児童の高齢者観を明らかにし、祖父母へのプレゼントを製作させることによって高齢者理解を深めさせる授業研究を行った。

その結果、ビデオによる学習や祖父母参観日における直接的な交流、またそれらに基づいて祖父母のためにプレゼントを製作することによって、高齢者の考え、生活行動の特徴を理解できた。直接的な交流は、自分たちの祖父母だけにとどまったので、高齢者のイメージを変えることは出来なかった。児童は今回の授業に大変意欲的に取り組み、さらに学習したいという者が3/4に達し、祖父母以外の高齢者との活動意欲を持つ者は80%以上にのぼり、積極的であった。

今後さらに、祖父母以外の高齢者との直接的な交流の場を設け、さらに高齢者理解を深めるような教材開発を行うことが課題となる。

参考文献

- 1) 生涯学習審議会答申：1992年7月
- 2) 中間美砂子：「現代における家族問題」、日本家庭科教育学会「家族」教育研究特別委員会、『これからの家族教育—カリキュラム構想と教材開発—』、p.17 (1997)
- 3) 大橋謙策：「福祉教育の構造と歴史的展開」、一番々瀬康子他編、『福祉教育の理論と展開』、光生館、pp.75～93 (1995)
- 4) 藤枝恵子、内藤道子他著：『小学校家庭科教育法』、家政教育社、p.118 (1988)
- 5) 日本家庭科教育学会：『家庭科の21世紀プラン』、家政教育社、p.118 (1998)
- 6) 渡辺彩子：「新潟県小・中学校における福祉教育の現状 —学校及び家庭科担当者への調査—」、日本家庭科教育学会第41回大会研究発表講演要旨、p.42 (1998)
- 7) 厚生省：『国民生活基本調査』、p.82、大蔵省印刷局 (1993)
- 8) 高田洋子：「祖父母、孫関係の現状とその規定要因について —北陸地方の一都市を事例に—」、日本家政学雑誌vol.44、no.10、p.1 (1993)
- 9) 保坂久美子、袖井孝子：「大学生の老人イメージ—SD法による分析」、社会老年学27、p.22 (1988)
- 10) 竹田久美子、細江容子、袖井孝子：「日・台・韓大学生の老人に対する態度と老後責任意識に関する研究（第3報）大学生の老人イメージ」、日本家政学会誌vol.42、no.5、p.5 (1991)
- 11) 9) と同じ
- 12) 10) と同じ
- 13) 多々納道子、黒崎淑子、平井早苗：「プレゼントを通して心のふれ合いを深めよう」、日本家庭科教育学会中国地区会『小・中・高等学校で生活福祉をどう教えるか、』日本家庭科教育学会中国地区会共同研究報告書、pp.1～6 (1996)

学 習 指 導 案

【第1次】

おじいちゃん・おばあちゃんを知ろう

授業日時 1996年9月10日（火）3・4校時

(1) 目 標

- ビデオを見て、高齢者の考えや実態を知ることができる。
- 高齢者の考えを認めたり、他者理解を深めることができる。

(2) 展 開

学 習 活 動	教 師 の 支 援 と 願 い
<p>1. おじいちゃん・おばあちゃんについて話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分のおじいちゃんやおばあちゃんは何人いるか。 ○自分のおじいちゃんやおばあちゃんについてのイメージ。 <p>2. 自分がおじいちゃん・おばあちゃんになった時のことを想像する。</p> <p>3. アニメ「ぼくがおじいちゃんでおじいちゃんがぼく」を観る。</p> <p>4. 感想を発表し合う。</p> <p>5. ぐらしの詩にまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が高齢になった時の事を想像させる事により、今までそういったことは考えてもみなかった事、日頃高齢者について考える機会があまりなかった事に気づかせたい。 ・ビデオに登場する主人公は自分たちと同じ5年生であることを告げ、親近感を持たせたい。 ・後で発表したり、ぐらしの詩に記入することを告げ目的意識をもってビデオを視聴するように促す。 ・ビデオの感想でも、自分たちの祖父母についても何でもいいから自由に記入するように告げる。

【第2次】

プレゼントは何にしようかな

授業日時 1996年9月13日（金）3校時

(1) 目標

- 自分の祖父母や他の高齢者の方達と積極的に交流を図ることができる。
- 祖父母のことを考えて、プレゼントを決めることができる。

(2) 展開

学 習 活 動	教 師 の 支 援 と 願 い
<p>1. 作成してきたばく・わたしのおじいちゃん・おばあちゃんレポートに基づき発表をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○おじいちゃん・おばあちゃんはどういった人か。 ○おじいちゃん・おばあちゃんの趣味。 ○おじいちゃん・おばあちゃんとの思い出。 ○敬老の日にしてあげたこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・できるだけ沢山の児童に発表させたい。
<p>2. これからの学習活動について確認し、作品の参考例を見る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・布やフェルトで作った作品を提示することにより、何を作るのかイメージがわからない児童のイメージを広げさせたい。
<p>3. おじいちゃんやおばあちゃんのことをよく考えながら、プレゼントするものについて考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・祖父母と相談をする。 ・自分で考える。 ・友達と相談する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の祖父母や高齢者との交流を積極的に行うように促す。
<p>4. 決まった作品の名前を発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・友達が何を作るのかについて知ったり、まだ何を作るのか決まっていない児童には、友達の作品も参考にさせたい。
<p>5. 次時までには用意する材料について考える。 次時までには作るものを考えてくる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・できるだけ、祖父母と話をしたり、相談することにより作るものを決めさせたい。

【第3次】

1. プレゼントを作ろう

授業日時 1996年9月17日(火) 3・4校時

9月25日(水) 5・6校時

(1) 目標

- 自分にあつためあてを決めることができ手順の書き方がわかる。
- 意欲的に製作に取り組むことができる。

(2) 展開

学 習 活 動	教 師 の 支 援 と 願 い
1. 決めたプレゼントについて発表する。 (9月17日)	・友達がどんなものを作るのかを知らせるために全員に発表させる。
1. 自分の進捗を確認する。(9月25日)	・児童の進捗を確認し、進捗に合わせて製作時間を調整する。
2. プリントにめあてと手順を記入する。 (9月25日)	・手順の書き方がわからない児童が多くいることが予想されるので、書き方の一例を板書する。
3. プレゼントを製作する。	
4. かたづけ・そうじをする。	

2. プレゼントを作ろう

授業日時 1996年10月1日(火) 3・4校時

(1) 目標

- プレゼントにこめた自分の思いを、メッセージに表すことができる。
- 作品を完成させることができる。

(2) 展開

学 習 活 動	教 師 の 支 援 と 願 い
1. おじいちゃん・おばあちゃんに手紙を書く。	・自分の思いが伝わるように、製作過程での苦労や工夫した点やどういった気持ちをこめて作ったか等について書かせるようにする。
2. プレゼントを製作する。	
3. かたづけ・そうじをする。	
4. 作品の展示会について知る。	・児童の進捗を確認し、後日作品の展示会をすることを告げる。